『スター・ウォーズ』における「フォース」の意義について

On the Significance of the Force in *Star Wars*

笠井　哲
福島工業高等専門学校一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2013年9月9日受理)

The thing standing out through the *Star Wars* series of George Lucas (1944～) remarkably has the concept of the Force representing the human subconscious, potentialities. There is the number, and, in lines of *Star Wars*, it goes without saying that the representative thing is that with the Force. Jedi can show the Force by the Midi-chlorian.

The purpose of this paper is to consider the significance of the Force in *Star Wars*. But, for the text, I use the Nobel not the scenarios of these movies.

Key words: *Star Wars*, Force, Jedi, Midi-chlorian

1. はじめに

ジョージ・ルーカス（1944～）の映画作品『スター・ウォーズ』シリーズを通して際立って目に付くものに、人間の潜在意識や潜在能力を表わす「フォース」（force 力）の概念がある。数ある『スター・ウォーズ』の台詞の中で、最も代表的なものが「フォースとともにあれ」であることはいうまでもない。

本稿の目的は、『スター・ウォーズ』におけるこの「フォース」の意義について、考察することである。ただし、テキストとしては映画のシナリオではなく、ノベライズ版を使用する。

例えば第4部『新たなる希望』においては、ベン・ケノービによって、「フォース」が次のように定義されている。

「だれとしゃべっているのか、ときどき忘れることがあってな。簡単に申せば、フォースとはジェダイの力の源じゃ。うまく説明できぬが、科学者たちは生物が生み出すエネルギー場だと理論づけておる。昔はフォースの存在そのものが疑われていた。現在でも充分認知されたとは言い難い。

フォースを感じ取れるのは特定の者だけだ。そうした者たちは山師、ペテン師、魔法使いなどと呼ばれ白い目で見られた。フォースを使いこなせる者となると、もっと数が少ない。つたない技量では、圧倒的なパワーをコントロールできないからだ。彼らは世の中からずっと誤解されてきた」[1)] と。

ここでまず、ジェダイとは何であろうか。ジェダイは古来、銀河世界の中で「法の番人」としての役割を担ってきた。ジェダイになるには、幼いうちからジェダイ・マスター（一人前のジェダイ）の下で、修行を積むことが通例である。そして、ジェダイ騎士団の承認を経た騎士だけが、ジェダイを名乗ることができる。我々はそれが、中世社会の徒弟制度に似たものであることを確認しうる。

このジェダイの間で使われている固有の用語が、「フォース」（力）である。例えば、ルークの父親はフォースが強かったなどといわれる。すなわち、それはジェダイとしての能力を指す。そこでは、フォースを如何に使うかということが問題となってくる。オビ＝ワンは、ルークにジェダイの武器としてのライトセーバーを渡す。

そのことを彼は、ルークの父親から頼まれていたという。そしてルークの父親が、優れたジェダイであったこと、ルークの父親がオビ＝ワンの弟子のダース・ヴェイダーというジェダイに殺されたこと、ダース・ヴェイダーはフォースを悪用して、銀河帝国の皇帝の手先になったこと、そしてジェダイ騎士団を解体に追

い込んで、ジェダイを次々に殺したこと、今日ではもはやダース・ヴェイダーに刃向かうジェダイはいないこと、などを教える。そして、「怒り、恐怖、攻撃性」は、フォースのダークサイド（暗黒面）を呼び起こすとされる。では、どうすればよいのであろうか。

「『心が平穏であれば』ヨーダはこともなげにこたえた。」[2)]

以下で、「フォース」について、映画の公開順ではなく、物語全体の流れに即して見て行きたい。

2. ミディ＝クロリアン

はじめに、『エピソード１　ファントム・メナス』から読み解いて行こう。

銀河の中心から遠く離れた、辺境にある惑星タトゥイーンにて、ジェダイ・マスターのクワイ＝ガン・ジンは、奴隷の身にある幼きアナキン・スカイウォーカーと出会う。

クワイ＝ガンは少年の素質に気づくと、ジェダイに育てるべく、奴隷であるアナキンの所有者に当たるワトーに賭けを持ちかける。ポッド・レースでアナキンが優勝したら、獲得賞金を全額渡す見返りに、彼を自由の身にするようにである。

このレースで使用されるポッド・レーサーは、スピードがあまりにも速く、通常の人間にはとても操縦できないが、秀でた反射神経を持つアナキンは乗りこなし、多くのエイリアンが出場する中、ただひとり人間としてエントリーしていた。

しかし、優勝経験もなければ、レースを完走したことも一度もなかったのだから、クワイ＝ガンの賭けは無謀ともいえる。ところが、アナキンは周囲の予想を覆して見事優勝を果たし、自らの手で自由を手にいれたのであった。

幼いアナキン・スカイウォーカーの資質に気づいたクワイ＝ガン・ジンは、彼の血液を採取してみると、「ミディ＝クロリアン」の値の測定をオビ＝ワン・ケノービに依頼した。

その結果を見て、二人は驚愕する。少年の「ミディ＝クロリアン」値が、マスター・ヨーダをはじめ、すべてのジェダイに勝っていたからである。

このことから、アナキンが「選ばれし者」だと確信したクワイ＝ガンは、少年をジェダイに育てることを心に決め、奴隷の身から解放させるよう行動するのであった。

「アナキンは頷いた。『ひとつ訊いてもいい？』クワイ＝ガンは頷いた。『ミディ＝クロリアンて何？』

風がクワイ＝ガンの長い髪をなぶり、意志の強い顔に吹きつけた。『ミディ＝クロリアンとは、あらゆる生物の細胞の中にいる微小の生命で、フォースと通じ合うものだ』

『それがぼくの中にいるの？』

『きみの細胞の中にな』クワイ＝ガンは言葉を切り、それから続けた。『われわれはミディ＝クロリアンと共存（シンパイオント）しているのだ』

『シン―何？』

『シンパイオントだよ。互いの役に立っている状態だ。このミディ＝クロリアンがなければ、生命は存在できない。そしてわれわれはフォースを知ることができない。われわれのミディ＝クロリアンが。絶えずわれわれに語りかけるのだ、アニー、フォースの意志をな』

『そうなの？』

クワイ＝ガンは片方の眉を上げた。『心を鎮める術を学べば、その声が聞こえる』」[3)]。

９歳の少年アナキンが、この説明をどれほど理解できたかは不明である。まとめると、次のようになる。

「ミディ＝クロリアン」とは、全ての生物の細胞内にすむ、知性をもった微小生命体であり、「フォース」を生み出す源である。

「このミディ＝クロリアン」とは、言葉の響きからヒントになったのは、ミトコンドリアであろう。ミトコンドリアとは、全ての生物の細胞質中に存在する細胞小器官で、呼吸およびエネルギー生成の場である。また、細胞の核とは別にＤＮＡを持ち、分裂による自己増殖能力を有している。

さらに、ミトコンドリアで注目すべきは、母親からしか受け継がない母系遺伝子細胞である点である。要するに、父親による影響力は皆無で、如何に優れていようとも、子どもに一切反映されないのである。それを踏まえて、次の引用を見てみよう。

アナキン・スカイウォーカーの底知れないフォースを直に感じたクワイ＝ガンは、母シミ・スカイウォーカーに問う。

「『クワイ＝ガンは庭に目を向けたまま言った。「あの子のフォースは驚くほど強い。それだけは確かだな。父親は誰だね？」

シミ黙っていた。『父親はいません』彼女はのろのろと首を振りながら、ようやくそう言った。「わたしが身ごもり、生み、育てたんです。それ以上のことは

話せません。」[4)]

このシミの主張が事実だとすれば、イエス・キリストを産んだ聖母マリアと同じく「処女懐胎」ということになる。これを聞いたクワイ＝ガンは、アナキンは、「ミディ＝クロリアン」による受胎の末、生まれたのかも知れないと考える。彼の考えでは、ミトコンドリアに自己増殖能力があるように、知性をもった「ミディ＝クロリアン」が意図的に働きかけ、優れた「フォース」を持つアナキンをシミに産ませたことになる。

しかし、もし「ミディ＝クロリアン」がミトコンドリアと類似の性質だとすると、母系遺伝子細胞ということになる。すると、ルークとレイアについてある疑問が生じる。アナキンは、ミディ＝クロリアンより生まれたとされるので、強い「フォース」の持ち主であっても納得できる。

しかし、アナキンとパドメの間に生まれた双子の兄妹が「フォース」の持ち主であることに違和感がある。というのも母のパドメが「フォース」の持ち主だと証明するエピソードがないからである。とすれば、考えられることは一つ、それは、「ミディ＝クロリアン」が、母系でなく父系遺伝子細胞であったということである。そうであれば、双子の兄妹がともに強い「フォース」を持っていたことも整合性が取れるといえる。

3. ダークサイドへの誘惑

「フォース」は、決して万能ではなく、善悪の区別がつかないという短所もある。以下で見て行くように、アナキンのように強大な「フォース」の持ち主は、善悪にかかわらず、あらゆるものを強く引き寄せてしまい、一度動き始めた「フォース」は、自分でも思い通り操ることができなくなってしまう。

『エピソード２　クローンの攻撃』には、次のようにある。アナキン・スカイウォーカーは、ようやくパドメ・アミダラと再会を果たし、10年間秘めていた気持ちを抑えることができずに、ついに告白する。

「アナキン『君はぼくの魂のなかにいる。ぼくを苦しめている』」[5)]

さらに続けて、

「『どうすればいいんだい？』彼はささやくように言った。『きみの言うとおりにするよ』」[6)]

パドメは、アナキンに惹かれながらも、次のようにいう。

「『こんなことはできない』

『どんなことでもできるさ』……

『わたしたちは現実の世界に生きているのよ。それに戻ってちょうだい、アナキンあなたはジェダイ・ナイトになるために学んでいる。わたしは元老議員だわ。……あなたの考えていることに従えば、それはわたしたちを行くことができない場所に連れていくことになるわ』

『それじゃ、きみも何かを感じているんだ！」

『……わたしのために将来を棒に振るようなことはさせられないわ』」[7)]

そこで、アナキンはパドメの決心を変えさせるために、次のように提案する。

「『ふたりのことは秘密にしておける』

『そしてうそをついて生きるの？　わたしたちが望んだとしても……』

『きみの言うとおりだ』彼はようやく認めた『このうそはやがてぼくらを破滅させるだろう』」[8)]

この予言は、後に的中してしまうのである。「フォース」を持つ者には、未来のことも見える。しかも、「フォース」は24時間働き続けている。たとえ睡眠中であっても、常に作動しているものである。

『エピソード２　クローンの攻撃』で、アナキン・スカイウォーカーは、母シミ・スカイウォーカーの夢を毎晩のように見た。それは幸せな夢ではなく、母の死を予期する夢であった。うなされながら目覚めたアナキンは、その夢を忘れるように努め、二度と見ないことを祈るが、その夜にはまた同じ夢を見た。

この夢も現実のものとなってしまった。

「そして空虚な心を埋めるように、しだいに怒りが、失いたくない人をうしなった怒りが、彼を満たしはじめた。

頭の隅では、その怒りにのみ込まれるな、と警告する声がした。これはダークサイドに至る道、だと……アナキンは立ち上がり、ライトセーバーをつかんで大またに小屋をでた」[9)]

そして母を殺した者たちに対して、アナキンがフォースの力で復讐を始める。そこには、

「フォースの力を借りて走り、逃げるタスケンに追いついては、ひとり残らず切り捨てていった。

空虚な喪失感はもう感じなかった。これまで経験したこともない、エネルギーと強さが、驚くほど力強いフォースが彼を満たしていた」[10)]

とあり、すでにアナキンにはダークサイドへの扉が開かれてしまっていることがわかる。そして、アナキンとパドメはこの後で結婚する。しかし、結婚が公にな

ることを避けてきた。その理由は、『エピソード３　シスの復讐』で、次のようにいわれている。

「彼女の夫はジェダイのままでいる必要がある。人々を救うのが、彼の天職、それを取り上げれば、彼の悩める心にある、あらゆるよいものが壊れてしまう」[11)]

妻パドメ・アミダラの妊娠を知ったアナキン・スカイウォーカーであったが、出産の末にパドメが命を落とす夢を見るようになり、不安に苛まれる。

母シミの一件から、もう二度と愛する人を失わないと心に決めていたアナキンは、彼女を救う方法を追い求めるが、なす術がなかった。行き詰ったアナキンはこともあろうに、より強大な力を得るべく、自らダークサイドに堕ちる道を選んでしまう。

「『アナキン、わたしのアナキン……』……『彼はこう言ったの―あなたがダークサイドに堕ちた、あなたがジェダイの……子供たちまで殺した、と』」[12)]

以上のように、「フォース」は睡眠状態でも常に働き続ける性質を持っていた。このため、悪夢と結びつくと、たいへんな事態を招いてしまうものである。

このあたりの経緯を『エピソード３　シスの復讐』にそって、少し詳しく辿ってみたい。

並外れたフォースを持つアナキン・スカイウォーカーは、着実に力を着け、師匠であるオビ＝ワン・ケノービをも凌ぐ勢いであった。

そんなときに、パドメ・アミダラから妊娠したと告げられる。それからというもの、アナキンは、彼女が出産の末に死ぬ夢を見るようになってしまう。母の死ぬ夢が現実化していたこともあり、どんな手段であろうと、パドメの命を救うことを切望し始める。

それに気づいたパルパティーン議長（シスの暗黒卿）から、ダークサイドに堕ちれば、彼女を死から救える絶大な「フォース」を手に入れられるとそそのかされ、ついにはシスのもとに下ってしまう。しかし、結果は、パドメを救えず、自分は左腕と両足を失い、ダークサイドの底に堕ちたのだった。

クワイ＝ガンが見込んだ通り、史上最年少でジェダイ評議員になるなど、アナキンは、奴隷の身分であった少年時代からは、想像すらできないような真の成功者への道を歩んでいた。

その先にも、さらなる輝かしい未来が待っているのは目に見えていた。しかし、パドメの死という試練を乗り越えることができなかったアナキンは、シスの策略にはまり、ダークサイドに引き込まれていく。ダークサイドの力は、負に満ちた力であり、どれだけ得ようとも、それが正の力に働くはずもなく、よもや人を死から救う力になどなるわけがないのである。

運命とは皮肉なもので、その無念さを込めてオビ＝ワンは、ダークサイドに堕ちた弟子のアナキンに対してこういった。

「『きみは選ばれし者だった！　シスに加わるのではなく、シスを滅ぼすことになっていたんだぞ！　フォースにバランスをもたらすはずだったのに、闇をもたらした。きみはわたしの弟だった』」[13)]

アナキン・スカイウォーカーは、シスの暗黒卿に近寄ったことで、ダークサイドに取り込まれ、ジェダイの道を踏み外してしまっただけでなく、妻や自らの手足など大切なものを失ってしまったのである。

4. フォースを学ぶ修行

映画は最初に公開されたが、スター・ウォーズ全体の第４部に当たる『新たなる希望』では、新しい主人公が登場する。ダークサイドに堕ち、ダース・ヴェイダーとなったアナキンと亡くなった彼の妻・パドメの間に生まれた双子の兄妹の兄、すなわちルーク・スカイウォーカーである。

ルーク・スカイウォーカーは、商人から購入したドロイド（Ｒ２－Ｄ２）が持っていたホログラム映像で、惑星オルデランの女王レイアが、ＳＯＳを訴える姿を見る。それを機にルークは、長年ひっそり暮らしていたジェダイ・マスターのベン（オビ＝ワン）・ケノービと出会い、はじめて「フォース」の存在を知り、ジェダイを目指し始めるのであった。

ベン・ケノービと出会ったルーク・スカイウォーカーは、宇宙へ旅立つことに興味を持った途端、帝国軍の襲撃によって家を焼かれ、養父母も殺されてしまう。帰る場所も自分を待っていてくれる人も、同時に失ったルークは、ジェダイになることを誓い、ケノービとともに宇宙へと旅立った。

ケノービは、次のようにいっている。

「『ルーク、ジェダイ騎士は千世代にわたって銀河中の人々から敬われていた。旧共和国の平和と正義を守り抜く守護者としてな』」[14)]

ルークは、無言のままぼんやり宙を見つめていた。注意散漫である、とルークを叱りつける年長者もいたが、ベン・ケノービは違った。誰よりも感受性の鋭い老人は、相手がしゃべり出すのを辛抱強く待っていたのである。以下は、ルークとケノービの会話である。

「『父はどんな死に方をしたのですか？』若者はゆっくりとした口調で尋ねた。

ベン・ケノービはためらいの色を浮かべた。取り上げたくない話題なのだろう。……

『裏切り者に殺された』ベン・ケノービは厳粛な面持ちで告げた。『ダース・ヴェイダーという若いジェダイにな』老人は目を伏せた。『ヴェイダーはわしの弟子のなかでも飛び抜けて優秀な男だった……わしは取り返しのつかぬ過ちを犯したことになる』」[15]

この後、ケノービが１で引用した「フォース」の定義に続けて、次のようにいっている。

「『われわれは一人ひとりフォースに包まれ、フォースによって結びつけられている。したがってフォースの使い方を修得したジェダイは、特別な力を持つことになる』」[16]

オルデラン行きを決意したルーク・スカイウォーカーは、ベン・ケノービらとともに、宇宙港都市モス・アイズリーにやって来たが、そこはデス・スターの設計図を持って逃げ出したドロイド（Ｒ２－Ｄ２とＣ・３３ＰＯ）を探し出すために厳しく監視されていて、ルークの警備のチェックを受ける。

しかし、ケノービの対応で難なく通り抜けてしまった。ルークがケノービに尋ねる。

「『もう、駄目かと思ったよ。どんな手を使ったの？』

『フォースは人の心を操ることができる。これほど強力な武器はないが、使い方にも気をつけぬと凶器になりかねない』」[17]

やがて、ダース・ヴェイダーに殺されてしまったベン・ケノービの助言に従い、惑星ダゴバを訪れたルーク・スカイワォーカーは、目的通りマスター・ヨーダの下で、「フォース」の修行をすることになる。

ヨーダから、沼に沈んだ宇宙船を「フォース」で持ち上げるようにいわれ、やる前から「もうだめだ」とこぼしてあきらめてしまう。

ヨーダは、ルークの傍らに立つと、苛立たしげに足を踏み鳴らしたていった。

「『なぜそう決めつける？』弟子を叱りつける『試してみたのか？　おまえはいつもそうだ。いままで何を聞いておった』？」[18]

ルークは、ヨーダに対して反論した。

「『石を持ち上げるのとはわけが違います』

ヨーダは本当に怒り出した。『たわけ！　違いなどあるものか！』弟子を怒鳴りつける。『おまえが違うと思っておるだけだ。そのような思い込みは捨てろ！百害あって一利なしじゃ』」[19]

ルークは、ヨーダの厳しい言葉を受け、半信半疑で挑戦しようとした。

「『わかりました。やってみます！』」

また間違ったことを言ったようだ。ヨーダの大喝が飛んだ。『迷いを捨てろ。やるときは思い切ってやれ、及び腰ではだめじゃ』」[20]

どれほど強力な「フォース」を秘めていても、まだ思い通りに使いこなせない段階では、無理な命令に聞こえる。

しかし、ジェダイのマスター・ヨーダは、ルークの言い分を即座につっぱねてしまう。ヨーダに促され、ルークが宇宙船を持ち上げようとするが、やはり失敗した。

「ルークは苦しそうに息をはずませた『大きすぎて』元気なく言う。『手に負えません』

『大きさは関係ない』ヨーダは断言した。『わしを見ろ。背丈でわしの力量が計れるか？』

ルークは、黙って首を振った。ジェダイ・マスターはさとすように言った。『フォースを味方につけるのじゃ。これほど強い味方はおらぬ。生命がフォースを生み出し、フォースを育てる。フォースはわれらを包み込み、われらを結びつける。われらは光り輝ける存在となって、個々の肉体を超越する』」[21]

ルークは、力の範疇を超えた命令にあきれてしまうが、ヨーダはそれを尻目に、宇宙船を自ら持ち上げて見せた。信じられない光景にルークは呆然とする。

「『信じられません」

『だから』……『しくじるのじゃ』」[22]

ヨーダのもとで修行をしたルーク・スカイワォーカーは、宇宙都市・クラウド・シティで、ダース・ヴェイダーとの戦いによって、右手を切り落とされてしまう。完全に敗北したルークは、絶体絶命の窮地に立たされながら、隙を突いて逃げ延びたものの、宇宙都市から危うく落下しそうになる。どうにか船体にしがみつき難を逃れたが、片手だけでは体力が尽きるのも時間の問題だった。

危機に陥ったルークが、妹のレイアに向けて「助けて！」と強く念じると、宇宙船で脱出途中だったレイアの心に届いた。ルークの一大事を察知したレイアは、危機を顧みずに引き返し、間一髪のところでルークの救出に成功した。

5. おわりに

ルーク・スカイウォーカーは、再びマスター・ヨーダに教えを請うべく、惑星ダゴバを訪れた。しかし、そこにいたのは病を患い、明らかにやつれ衰えた、小さなジェダイだった。第６部『ジェダイの復讐』に、次のようにある。

「『なんじゃその顔は』ヨーダは皺だらけの顔を愉快そうにほころばせた。『そんなに具合が悪そうか？』

ルークは浮かない顔つきを隠そうと座る位置をずらした。『いえ、マスター……そんなことはありません』

『嘘をつけ！』小柄なジェダイ・マスターは楽しそうに笑った。『見てのとおり、わしは病んでおる。年老いて弱っておる』曲がった指を若い弟子につきつける。『九〇〇年も生きておれば、くたびれるのは当然じゃ』」[23]

そして、自分がやがて永遠の眠りにつくことを、ルークに宣言する。驚く弟子に向かって、これも「フォース」による宿命であることを次のように説く。

「『いかに修行を積み、フォースが強くなっても、不死身ではない！　わしにも黄昏がやって来た。まもなく夜の帳が下りよう。自然の摂理……フォースの導きなのだ』」[24]

ルークは、ダース・ヴェイダーが死んだと聞かされていた父親であると知り、オビ＝ワン・ケノービの霊体を問い詰めたところ、次の答えが返ってきた。

「『お前の父アナキンは、フォースのダークサイドに引き込まれた―アナキン・スカイウォーカーであることをやめて、ダース・ヴェイダーへと変身したのだ。つまりアナキン・スカイウォーカー人格を裏切ったことになる。善なる部分が破壊されたのだ。見方を変えれば……わしの言ったことに嘘はあるまい』」……『真実がいかに見方に左右されるものなのか、いずれおまえにもわかるときが来る』[25]

すなわち、真実が多面的であるということは、この物語のラストでも説かれている。完全にダークサイドに堕ちたダース・ヴェイダーであったが、実の息子であるルーク・スカイウォーカーとの出会いが、彼の心を闇から救い上げた。自らの手で、悪の根源である皇帝を葬り、最後にはルークに自分の非を詫び、父親の顔で息子に別れを告げることができた。

長くダークサイドにいても、抜け出すことができた。それを可能にしたのも、やはりアナキンとルーク親子の持つ「フォース」であったといえよう。

文　献

テキストは下記の６冊を使用し、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表記する。

Ⅰ．ジョージ・ルーカス原作、テリー・ブルックス著『スター・ウォーズ　エピソード１　ファントム・メナス』富永和子訳（ソニー・マガジンズ、1999）

Ⅱ．R・A・サルヴァドア著『スター・ウォーズ　エピソード２　クローンの攻撃』富永和子訳（ソニー・マガジンズ、2002）

Ⅲ．ジョージ・ルーカス原作、マシュー・ストーヴァー著『スター・ウォーズ　エピソード３　シスの復讐』富永和子訳（ソニー・マガジンズ、2005）

Ⅳ．ジョージ・ルーカス著『スター・ウォーズ　新たなる希望』石田亨訳（竹書房、1996）

Ⅴ．ジョージ・ルーカス原案、ドナルド・F・グルート著『スター・ウォーズ　帝国の逆襲』同上。

Ⅵ．ジョージ・ルーカス原案、ジェームズ・カーン著『スター・ウォーズ　ジェダイの復讐』同上。

1）Ⅳ．107
2）Ⅰ．239－240
3）Ⅴ．152
4）Ⅰ．145
5）Ⅱ．220
6）Ⅱ．221
7）同上。
8）Ⅱ．222
9）Ⅱ．295
10）Ⅱ．297
11）Ⅲ．199
12）Ⅲ．480
13）Ⅲ．501
14）Ⅳ．105
15）Ⅳ．106
16）Ⅳ．105
17）Ⅴ．121－122
18）Ⅴ．139
19）Ⅴ．140
20）同上。
21）Ⅴ．140－141
22）Ⅵ．90
23）Ⅵ．91
24）同上。
25）Ⅵ．96